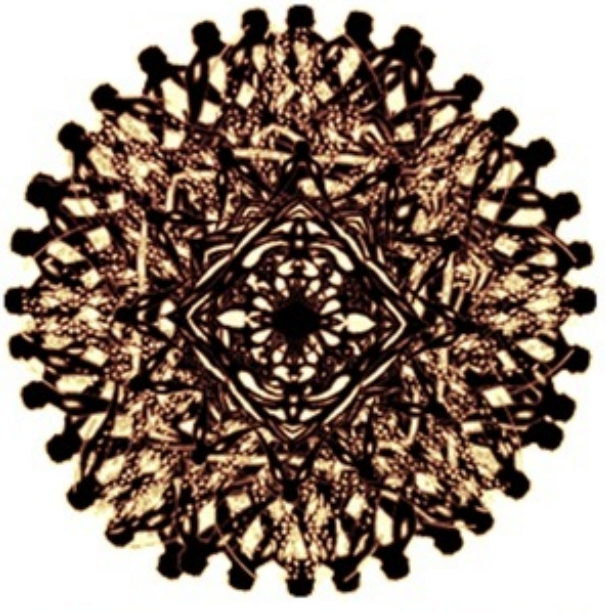
Adorare

アドラーレ02



片足靴屋/Sheagh sidhe　SAKIHA HAENO

Adorare

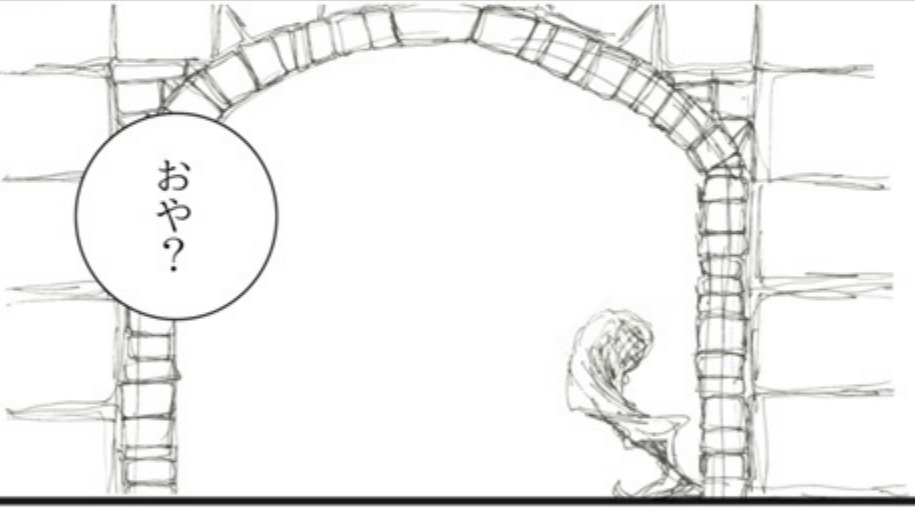
アドラーレ02

片足靴屋/Sheagh sidhe　SAKIHA HAENO

いつもの場所で、
いつものように、
青空をながめる。

僕が住んでいるのは海辺の家だった。
どのくらいそこで過ごしているのか、
数えたところで意味などないだろう。
そうとに気づいてしまったからには、
もとより不毛を好まぬ性分、上澄と
流れゆく年月を数えることはやめた。
時の流れを数えずに過ごしてみれば、
凪のような日々は融けた飴のごとく、
ひどく優しく、僕の息を詰まらせた。
有閑と逼塞の、倦怠と怠惰の区別が
消失するのはそれこそ時間の問題で、
この家こそが檻であると気づいた頃、
僕は、ぼんやりと青空を仰ぐだけの、
何かが枯渇した物に成り果てていた。

変化は唐突に降ってくる。



あの窓から片翼が覗くのは珍しいことではない。
だが、鹿の角が覗いたのは初めてのことだった。

そうして僕は、
海辺の家の新たな住人をみとめた。

カタハネのアレは気難しい

そんなことは周知の事実だが、
この家の新たな住人は、
よりにもよって、
アレに懐いているようだった。

他にも誰かいただろうに

最初に話しかけた相手がアレで、
単にはなれられないだけなのか。
ものずきなのか、悪趣味なのか、
あきれるほどのお人好しなのか。
まったく、謎は深まるばかりだ。

ならば本人に訊いてみればいい。
考えたところで答えを得られぬ
ものを考えたところで仕方ない。
かといって、こちらから進んで
声をかけるほどのものでもない。
その思いつきも結論も忘れた頃、
それこそ唐突に、機会は訪れた。

とある冬の日。
カタツノのソレが、
窓から身を乗り出し、
私に声を落としてきた。

寒くないですか？

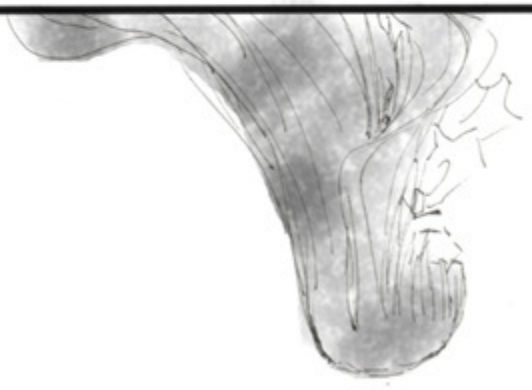
久方ぶりに見上げたソレには
記憶にあった角がなかった。
あの角は私の勘違いかと
首を傾げてみる。
すると、

春になったらまた

私の疑念を汲んだソレは、
頭を指差しはにかんだ。

春になれば角が生え、
冬になれば抜け落ちる。
造られてから今まで、ずっと、
その廻りがソレの営みなのだろう。

僕は誤解していた。



ソレの廻りは目に見える。
滞留に厭いているアレが、
目に見えるかたちとして
移行を示してくるソレを
易々と手放すはずはない。

僕であっても、
手放すはずは、ない。

あの！

なんだい？

いつも、空、
仰いでますよね

あぁ、
そのこと

カミサマが贈り物を
落としてくれるのを
待っているんだよ

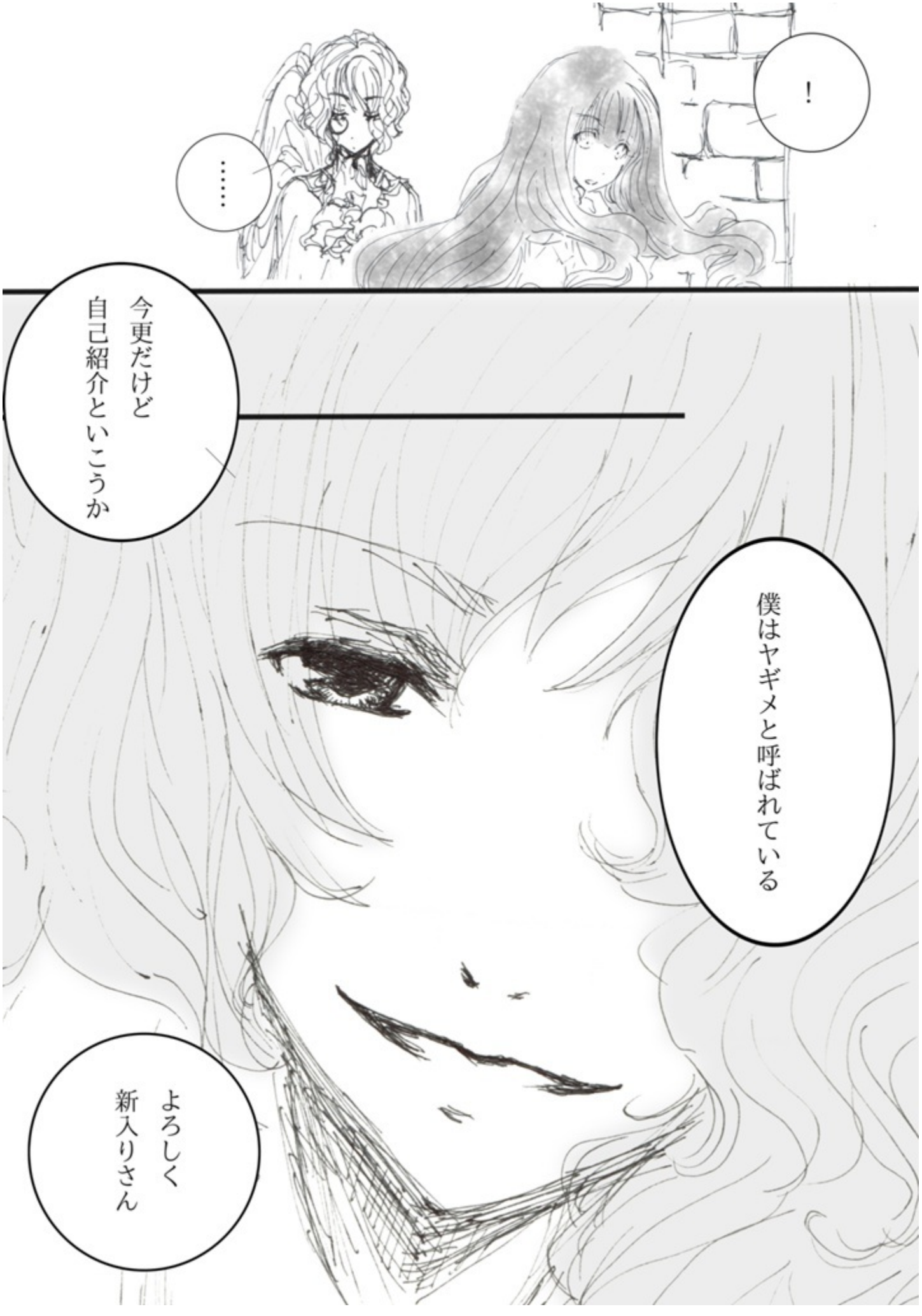
ずっと？

無為なだけだ

カタハネ。
キミにだけは
言われたくない

あの、
けんかは

気にすることはないよ
僕らはこれが常態さ


！
……
今更だけど
自己紹介といこうか
僕はヤギメと呼ばれている
よろしく
新入りさん

あとがき

ヤギメさん登場回。横瞳孔むずかしいです。

2015/06/02　南風野さきは

アドラーレ　02

著(描)：南風野さきは

発行　：片足靴屋/Sheagh sidhe

URL：http://id12.fm-p.jp/20/LIR/
Twitter：@SAKIHA_HAENO

※著作権は著者に帰属いたします。

※この物語はフィクションであり、実在の人物・団体・事件等には一切関係ありません。

アドラーレ02

http://p.booklog.jp/book/98560

著者：片足靴屋/Sheagh sidhe
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/leithbhrogan/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/98560

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/98560

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ